少年バザー

♥売春♥露出♥倫理喪失♥

少年バザー　第１話

【♡ワンコインのべろきすドール♡】

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「いらっしゃいませー」

透き通ったボーイソプラノが飛び交うのは森林公園の小さな広場。開けた場所に見えるがその実、公園の囲いは有刺鉄線が巻きつけられ、徹底的に入場者が制限されている。
周囲には一般の住宅や小学校もあるが、大木が立ち並び目隠しになっているため、中で何が行われているかは関係者しか知る由はない。ここは“そういう”イベントスペースである。

そして本日、晴れやかな青空のもと行われているのは……

「キス１分で２００円！　５分で６００円ですよー♡」

『少年バザー』とクレヨンの手描きで書かれた、運動会の入場門のような看板には、まさにバザーらしく簡素なテントの下にぽつぽつと少年が立っている。だが足元のブルーシートに一つも商品らしき物品は乗っていない。
まだ明らかに◎学生である、愛らしい少年自身を除いては……。

「５分で♡」
「ありがとうございますっ♡」

前髪をキッチリとポマードで固めたスーツ姿のロマンスグレーは、普段は職場で鬼部長と恐れられている厳格なつくりの顔をだらしなく緩めて、少年に千円札を差し出す。ネクタイまで緩めてやる気満々だ。

少年はおつりを手渡すと、さっそくスーツの腰に縋る。

「しゃがんでください～」
「ハアハア……♡　サービスしておくれよ♡」
「お任せください♡　◎学生のべろ、いっぱい食べていってくださいね♡」

およそ◎学生とは思えない卑猥な殺し文句である。
年配のサラリーマンは年甲斐もなく少年の唇に食らいついた。
スーツが汚れるのも構わず地面に膝をついて、小さな背中を抱き込み、ペロペロ、クチュクチュと唇を舐め始める。
少年の手には小さなキッチンタイマー。無断で持ち出してきたからきっと母親は料理にてこずっている事だろう。
まさか息子が６００円もらうために中年男とキスする５分間を測っているとは思いもしない。

「ハアハア、ベロベロ、グチュグチュ、ベロベロ……」
「ンッ♡　おじさんべろ♡　どうぞぉ♡　れー♡」
「おおっ♡　はむっ♡　れろれろ♡　れろれろ♡　れろれろれろ……♡」

高速で弾いてくる男の興奮が少年にも伝わる。キュン♡　と疼くお股を弄りながら、チュパチュパ♡　チュパチュパ♡　控えめに男の舌を吸って誘惑する。
その甘美な刺激と言ったら……この上ない多幸感に男の膝がガクガクと震える。
今なら一日１００時間は働けるし、部下のどんなミスも笑顔で許してやることができそうだ。

「ハアハア♡　いいよ～♡　次はおじさんの番だ♡　べろ出しなさい♡」
「はぁい♡　残り３分、いっぱい吸ってね♡」
「オオッ……♡　ジュウ～ッ！！♡　ジュパジュパ！！♡　ヂュコッヂュコッ♡♡」
「ンン～～♡♡」

こんな◎学生が存在するのか。
自分の舌を破格で売り出して、あまつさえ男を誘惑して自分もしっかり感じているとか……♡

未成熟な股間をモミモミする小さな手を盗み見ながら、少年がもっと自分とのキスで感じるように肩をいやらしく撫でさすり何度も激しくキスの角度を変える。

心から美味しいと伝えるために、絶え間なく水音を立てて細かく吸い付いていく♡

「んふ、ハアハア♡　おじさん……♡」
「ねえ♡　唾液交換はダメかい？♡」
「え……♡　おじさん興奮しちゃったんだね♡　カワイイ♡」
「早く！！　時間がなくなる！！　もっと君のお口が欲しいんだよ！！」
「じゃあ……３００円くれたら１分延長と唾液交換オッケーだよ♡」
「払う！！　ホラ３００円！！　よ～し可愛い男の子にツバ飲ませちゃうぞ～～♡　モゴモゴ♡」
「アン♡　臭そうでドキドキしちゃいます……♡」

煽りスキルも満点だ。
かくして少年はその若く清潔な口内に、中年男の唾液を熱烈なキッスとともに受け取る。

「ンッ……♡」
「ンッほ♡　ブヂュヂュ♡　ジュルジュル♡」
「ハアハア……♡」
「おおっ♡　飲んでくれたんだね♡　どうだったっ？」
「おいしい……♡　こんなふうに思うの、恥ずかしいけど……おじさんみたいなヘンタイさんのツバ飲まされるの、ドキドキしちゃう……♡」
「ンほ～！！♡　君のおツバももらうよ！♡　ヂュルルルルル～ッ♡」
「んふぁ♡　ダメぇ♡　そんなに吸っ♡　ヂュルルルルル～♡」
「ハアハア！！　君からも吸って！　ホラホラホラ！」
「ふぁい♡　……ンッンッ♡　ジュッジュッ♡」
「恥じらいながらの吸引たまらん♡　お返しだゾッ♡　ヂュルッ！　ヂュルルッ！！」
「ンン～～♡」

けたたましい吸引音が辺りに響き渡る。
男たちは卑猥な水音に引き寄せられ、幸せキスタイムを満喫する男の後ろにすぐさま行列を成してしまった。
口内を貪る男の肩越しに……舌なめずりして自分の唇をつけ狙う男たちを見て、少年はプルプルと歓喜に打ち震えた。

今からあんなにたくさんの男の人たちにお口を好きにされちゃうなんて……♡
キス中毒になっちゃったらどうしよぉ♡♡

興奮のあまり目の前の男にしがみつく。
すると男は何を勘違いしたのかいきり立ってますます激しく少年の唇をしゃぶりだした。
鬼課長も、キス大好き美少年の前では、まるで飢えた乳飲み子だ。

「君のお口最高だヨッ♡　もっと味わいたい♡　お口以外も♡　ホテル♡　ホテル行かないかいっ？♡　ハアハア♡」
「アン、ダメ♡　後ろ見て……♡」
「おおっ？」

男は自分の後ろにぞろりと並ぶ人数を見て驚いた。
先程までは誰もいなかったのに。
自分と少年の熱烈な接吻をこれだけの男たちに羨ましがられているのだと知ると、見せつけるように向きを変えてレロレロと舌を伸ばす。

「今は私だけの君だよっ♡　ホラ舌を絡めて♡　フホ♡　フホッ♡」
「れるれる♡　ハァ♡　はずかしいよォ♡」
「恥ずかしいお店を出してるのは君だろ♡　責任持ってこの人達にもこの美味しいお口味わってもらうんだヨッ♡　チュポチュポ♡　ほほお♡　べろうま♡」
「はぁン……♡　キスだいすき♡　チュッチュッ♡」

少年は流し目で次の客を見つめながら目の前の男の唇を吸う。
その扇情的な態度に、列の男どもは一斉に股間を押さえた。
キス終了のタイマーが鳴り響く。

「ン……♡　お時間です♡　美味しかった？♡」
「とっても！！　美味しかったよ！！　またシたい！！　次来たらセックスさせてくれるかい！？♡」
「アン……♡　それは……困っちゃいます、ボク……♡」
「退けよ！！　次は俺の番だ！！」

痺れを切らした先頭の男が割り入ってくる。
そして少年の唇に噛み付くようにキスを開始した。

今の今まで自分を支配していたのとは違う匂い……体温……。
少年はあっさりとその逞しいタンクトップの胸筋に身を預ける。

「フン！　フン！　フン！！」
「ンフッ♡　んふ♡　んふぅ♡　ハアッハアッ♡　はげし♡」
「口大きく開けろ♡　べろもたくさん出せ♡　限界まで♡　そう……♡」

しばし少年のアヘ顔を堪能した後で、若マッチョはぬるりと舌を掬い上げて――

ジュルルルルルッ！　ジュッ！　ジュジュ～ッ！！
チュバチュバ！！　レロレロ♡　ヂュッヂュッ！！

「んふぁ～～ん♡♡」
「これが◎学生の味か！！　ウマイぞ！！　ヂュ～～♡♡」
「ンン♡　ンン～♡♡」

少年の唇を取られた先客はまだ屋台にとどまってニヤケ顔で己の股間を揉んでいる。寝取られ気分まで味わえて一石二鳥のようだ。
唇を貪られながら少年が差し出したバスケットに、ハッと我に返って料金を投げ入れた。すでに他の男に唇を蹂躙されながらもキス料金をせがむ美少年が妖艶すぎて、列の中では早くも達してしまい離脱する者もいる。

「お前の味、セックスしたくなるな♡　追加払うからフェラしろよ♡」
「ンンだめ♡　後ろのお客さんもボクとキスしたいの♡」
「じゃあ列が捌けたら決めろよ♡　一番キスがヨかった男とここでセックスしろ♡」
「ンッそんなぁ♡　ボク処女なのにッ♡」
「処女でキス売りやってんのか？　今日はレイプ期待してきたんじゃねえのか♡　俺のが一番デカいぞ♡」
「ンン♡　らめ♡　ンン♡」

股間を擦り付けてアピールしてくる筋肉オス。今この列に並んでいる男たちはキスどころか自分の貞操まで求めているのか。そう妄想すると脳がとろけそうだ。
未知の快楽に想いを馳せながら、股間を擦り付け返してキスに応える。

「チンコ擦り付けあってるぞ！！」
「アレして追加料金いらないのか！？　神！！！」
「キス中にモロ出ししてぇー！！♡♡」

小癪な手を使って、少しでもいい思いをしようとする後続の獣どもの声に、少年はぶるりと

感じてしまう。
そこに、妄想の余地を与えないほどの貪りキス。

タイマーが鳴ると次々男が入れ替わり、少年は誰とキスをしているかもわからず、ただ目の前の唇を食みつづけるだけの世にもスケベなべろキスドールになってしまった。
手に握らされているのはなんなのか。後ろから手をまわしてシャツの下を弄っているのは誰なのか。それすらもわからない。

「この子キスだけでトロけすぎだろ♡　キス輪姦ってできるんだな♡」
「もう挿れてもバレないんじゃないか？♡」
「順番な♡　万札置いときゃこの子も満足だろ♡　穴慣らそうぜ♡」

クチュクチュ、クチュクチュ……今までと違う刺激に身じろぐ少年。
しかしすでに身体の自由が効かない。幾人もの男に拘束され、四方八方から撫でられ舐められているのだ。じきに、テントから少年のくぐもった嬌声が響き始める。

「ショタの安全第一に！」の腕章を付けた通りがかりの見回りスタッフは、少年の艶やかな脱処女のエロ声を聴いても、満足そうに頷くのみだった。

さあ、エロショタ祭りの華々しい幕開けだ。